

# 医療タイムス

週刊医療界レポート

2015.3/23 No.2200

特集

## ビジョナリーホスピタル認定を探る 評価対象は環境対策と事業継続体制



特別企画

第16回都道府県医師会介護保険担当理事連絡協議会  
医療・介護の連携を強く意識  
18年度の同時改定の基礎を固める

タイムスレポート

シンポジウム「がん-みんなでつくる予防と医療-」  
変わるがん医療  
がんの発症を知り予防する

Top News

与党税制協議会への意見申述を要望 日本医師会  
特定行為研修「専門性を発揮し、国民のニーズに応える」 日看協

# 冬の時代の診療所経営

## 今、なぜ「死の授業」なのか

新聞を開くと、東京大学救急救命部の矢作直樹先生が書かれた「人は死なない」という本の広告が目飛び込んできた。これは面白そうだ。きっと社会的な死や死後の世界のことが書いてあるに違いない。当然、私もそう考えた。しかし現実には、人はとりあえず死ぬ。高齢者になるまで1度も死を見たことがないという人が結構存在する。病院死が在宅死を上回って約40年が経過するが、現在60歳代の方は、「病院の時代」を生きてきたので、「死」が遠いものになっている。週刊誌の報道によると在宅医療を積極的に行う医師でさえ数百人の患者さんを診ていながら看取りが年間ゼロというケースがある。特別養護老人ホームでさえ、1度も看取りを経験したことがない所もある。年々「死」が地域から隔離され、ますます非日常になってきた。在宅での看取りが増えない要因の1つは、死がタブー視されていることだろう。2月の土曜日のゴールデンタイムに某民報の2時間特番「中居正広の僕はこうして死にたい！」という番組に解説者として出演する機会があった。その中で某アイドルタレントは「私は死にません！」と言ってのけた。これが若者、いや多くの日本人の本音かもしれない。

一方、アメリカのブリタニー・メイナードさん(29歳)の安楽死が報じられたことは記憶に新しい。脳腫瘍で余命半年と宣告されて半年が経過したがまだ元気だった。しかし恋人の名前が言えなくなる前に死にたい、と医師から処方された薬を予告通りに飲んで亡くなった。オレゴン州は安楽死が認められている。しかし多くのメディアは、この安楽死/自殺を尊厳死と誤報した。私のコメント部分にはちゃんと「安楽死」と書きながらも大見出しでは「尊厳死」と誤って記した。いまだに訂正や検証記事が出ないのは、書いた記者自身が誤報の理由を理解できないからである。「今まで、死を考えたことがないのでどう書いていいのかわからない」と



医療法人社団裕和会理事長  
長尾クリニック(尼崎市)院長 **長尾 和宏**

1958年香川県生まれ。東京医科大学卒業、医学博士、日本慢性期医療協会理事、日本尊厳死協会副理事長、関西国際大学客員教授、近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」「平穏死という親孝行」など。

クリニックHP <http://www.nagaoclinic.or.jp>

長尾和宏オフィシャルサイト <http://www.drnagao.com/index.html>

告白した記者がいた。「死」のタブー視は、世間やマスコミだけでなく国会においても同様である。例えばリビングウイルの法的担保に関する議論は10年間、ほとんど停滞している。

ブリタニーさんの報道で一番驚いたのは多くの若者が反応したことだった。某週刊誌の調査によるとなんと9割が尊厳死に賛成で、7割が安楽死に賛成と答えていた。「俺も安楽死したい」「なぜ日本では安楽死できないのか」という意見がネットに書きこまれた。日本では安楽死は殺人罪で、尊厳死でさえ、たとえ本人のリビングウイルがあっても法的にはグレーであることを彼らは知らない。これまで「死」の話題と云えば、終活に代表される高齢者の話だったが、意外にも若者が反応したのだ。そこで急ぎよ、昨年末に若者たちを対象に都内で「死の授業」を行った。これが大変面白かったので「長尾和宏の死の授業」(ブックマン社)という本となり世に出た。尊厳死、安楽死、平穏死の違いを分かりやすく解説した。これまで「いのちの授業」と銘打った本はあったがズバリ「死の授業」の本は初めてではないか。

3月5日、東京大学の医学生に「死の授業」を行った。その模様は、現在、朝日新聞・アピタルに連載中である。今後、高齢者だけでなく、若者とも「死」を1人称の視点で語り合いたい。多くの医学生にも読んでほしい。医学の発展に伴い、さまざまな医療の「やめどき」がますます分からなくなっているからだ。